

てこな・ミュージック・ジャーナル

平原綾香「ノクターン カンパニュラの恋」

ショパンのノクターン第20番と言われて、そのメロディーを即座に思い浮かべることができる方は、かなりのクラシック通ということになるでしょう。でもドラマ「風のガーデン」のテーマ曲、平原綾香さんが歌う「ノクターン/カンパニュラの恋」と言われれば、多くの方がお分かりになるのではないでしょうか？

昨年の木曜の午後10時から1時間、フジテレビ。あらためて筋を書く必要もないかもしれませんが、ご覧にならなかった方のためにさっさとご紹介しましょう。倉本聡脚本、北海道富良野を舞台に、地域の末期医療に取り組む年離れた医師に縮形拳。息子（中井貴一）とは人生観の違いから絶縁し、広大な庭園でいつも花々の世話をする2人の孫を引き取って暮らしています。高度医療の医師として東京で暮らしていた息子が末期癌に侵され、自分のもとの帰ってきたことで家族の再生をはかり、その死を看取っていくという物語です。富良野の花農園の美しさとともに繰広げられる人間模様の機微の豊かさもさることながら、時おり流れる平原さんの情愛と哀愁をにじませるメロディーが雰囲気を一層もりあげて、本当に印象深いドラマとなりました。

■原曲はショパンのノクターン 「レント・コン・グラン・エスプレッショネ」

今回は平原さんが旋律に選んだ原曲で、ショパンが20歳の時に作った「ノクターン」についてお話しようと思います。ショパンのメロディーが醸し出す心に響く悲しげな音色とその音域は、まさに平原さんの雰囲気と声質にぴったりで、原曲の素晴らしさを一層引き立てています。ホルストのジュピターと同様に、クラシック音楽を自分のものとする平原さんの才能には感服してしまいます。

ノクターンとは「夜想曲」と訳され、一般には叙情的な小品のことですが、ショパンは、装飾ゆたかに情愛をしっかりと、あるいは時に情熱を秘めて歌う傑作を21曲作りました。平原さんが取り上げて「ノクターン/カンパニュラ」としたのは、嬰八短調のノクターンで「レント・コン・グラン・エスプレッショネ」とも呼ばれ、「非常に感情を込めてゆっくり」と訳すことができます。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

■思いを重ねて

ショパンは20歳。1830年、1人異郷のウィーンで冬を迎えていました。譜例のように最初の2小節はあたかも歌の前奏のように繰り返され、ここにすでにこの作品のそこはかかない哀愁が聞こえてきます。平原さんは、愛する人がいなくなる切なさ、カンパニュラの花とともにその思い出を大切に、時がたとうと愛した人のことを忘れられるはずはないといったことを歌っています。

メロディーもさることながら、私はこの歌詞にもショパンを感じてなりません。と言いますのは、ポーランド・ワルシャワで大人気の音楽家からさらにヨーロッパの中心での活躍を望んで、大舞台ウィーンにショパンが勇んで到着したのは、1830年12月でした。でも列強ロシアに故郷は占領され、敵国オーストリアはショパンの才能に見向きもしなかったのです。愛する人たちと別れた辛さに追い討ちをかけるような成果のない日々。住まいをいくら優雅にしてみても、孤独感でどうしようもなかったようです。故郷に帰れば、自分を大切にしてくれる父も母も姉妹もそして恋人のコンスタンツヤもいます。でも多くの人に期待されて旅立ってきたのですから、おいそれと帰るわけにはいきません。愛する人たちへの思い、憧れを胸に生きるしかない辛さ、そんな気持ちからノクターン20番を作り、それを故郷にいる大好きな姉に贈ったのです。

■カンパニュラとすみれ

このドラマで主人公が愛する花はガーデンに咲き乱れるカンパニュラ（フウリンソウ）で、死の床で娘に最後に頼むのがカンパニュラを押し花にして自分を慕ってくれた人に贈ってほしいというものでした。一方、原曲の作者ショパンが愛したのはすみれの花でした。21歳から死の39歳まで過ごしたバリで、優雅な住まいはいつも貴族の弟子たちが贈る花々の芳しい香りにあふれていました。でもショパンは派手な花よりも素朴なすみれの花束とその香りを取りわけ好んでいました。自分の死期を意識したとき、最後の日々で目にしたいと望んだのがすみれだったのです。カンパニュラとすみれ、季節が巡ってくれば必ず目にする花、そうであるからこそ、人は自分の密やかな思いをそのような花に託しながら生きていくのかもしれませんが。最後に花言葉をお教えしましょう。カンパニュラは「感謝」、すみれは「愛、希望」です。



(ショパンのノクターン第20番)